

『生活と住居』（昭和21年～23年）にみる 生活様式の変化と住まい方の考察

日大生産工（院） ○金丸 悠紀子
日大生産工 浅野 平八

1. 研究目的

現在、日本の暮らし向きは豊かになった。しかし、各々が好きなように生活し、住宅に求めることが多くなって来たことで、住まい方は多様化しており複雑になってしまっている。そしてその中で、“目標とすべき日本の住まい”とはどのようなものかは確立されておらず、混沌としている。藤井厚二は著書『日本の住宅』（1928年）の中で次のように述べている。

「日本の住宅として特色ある建築の出来ないことは実に大なる恥であると思いますから、一日も早く我国固有の環境に調和し、吾人の生活に適応すべき文化住宅の創造せられんことを熱望してやみません。」*1

このことから、住まい方が多様化している現代にこそ“求めるべき住宅”が確立され、自分が好きなように住まうのではなく、日本固有の住まい方を見つけるべきではないかと考えた。そこで、本稿ではまず西欧文化が入ってきた明治以降、日本の住宅がどのように生活様式・住まい方を変化させ、発展させていったかを文献により調査し考察することを目的とする。

2. 研究方法

戦争中多くの建物が焼かれ、その復興とともに日本の住宅のあり方は大きく変化した。そこで、本稿では戦後発行されていた雑誌、『生活と住居』（1946～1948年）から当時かかえていた住宅問題や生活様式の変化を考察する。

『生活と住居』において、住宅に関して記述しているものを抽出し以下のことを考察する。

- ①洋風住宅と和風住宅のとらえかた。
- ②「和」の要素

③当時の生活様式の変化・住まい方

4. 考察結果

4-1 洋風住宅と和風住宅のとらえかた

明治以降、日本では洋風住宅と和風住宅が混在し住まい方が確定せず、どちらの方がよいかということが問題になっていた。雑誌『生活と住居』で各々掲載されている文章をまとめると以下のことが読み取れる。

①和風住宅は非合理的である。

このことは、一番多く記述されていた。さらに、合理化・科学化するうえで、日本の伝統である和風住宅は捨てるべきであるという見解も多くあった。和風住宅が非合理的である理由としては、次のことが読み取れる。

- a.) 和風住宅は木と紙など燃えやすい材料で出来ている。
- b.) 注文生産で、大抵大工・棟梁によって建てられているため規格化されておらず、工場で大量生産ができない。
- c.) 畳や襖、縁側などは毎日掃除をしなければならず、十分な手入れが行き届かなければ不衛生でみすばらしく見えてしまう。掃除の手間の程度として、巻頭言で小野薫氏は次のように述べている。

「日本の良さ、それはすてがたい事です。けれどもすてざるを得ないのです。日本住宅をすて去ることが日本婦人を家庭労働の奴隷から一人の人間に進める大きな一歩であることを考えさせられるのです。」*2

②洋風住宅は能率的である。

洋風住宅は和風住宅よりも高価なものであったが、椅子式の利便性や、畳の張り替えがないことから能率的であるとされていたことが読み取れる。このことについて、『燃えない家』で田邊平学は次のように述べている。

「文化国家新日本の住宅建築としては、保健的にも

A study on change in life style
and on way of dwelling of “HOUSE AND LIFE”

Yukiko KANAMARU, Heihachi ASANO

また能率的にも遥かに優秀な立式、即ち椅子式を採用すべきものと信じている。」^{*3}

また、住宅不足の中で能率的に住宅を建てる方法として住宅の規格化による工場生産があげられている。『生活と住居』では、組み立てコンクリート住宅について記述されている。

③洋風住宅の模倣の問題

このことは藤井厚二も述べていたが、洋風住宅をそのまま鵜呑みにして文化的な生活様式と勘違いしたことが多いことを指摘している。理由としては次のことが読み取れる。

a.) 「気候風土」：日本と西欧の気候風土が異なるので、そのまま模倣した住宅では日本の気候にあったものが出来ない。

b.) 「土地の大きさ」：日本の土地が西欧に比べて非常に小さいので、そのまま模倣した住宅では窮屈になってしまう。このについて、『住宅問題の解決の方向』で本城和彦は次のように述べている。

「日本の狭い土地にヨーロッパやアメリカの人たちのもっているものを一通り並べてみたような家がある。これは建てることを想定していなければ美しいかもしれないが、今後建てられ得るような印象を読者に与えつつ提供されるということは有害無益である。」^{*4}

4-2 「和」の要素

本稿では障子、すだれ、畳について述べる。

障子とすだれについては、日本の夏季の高温多湿という環境の中で、少しでも快適に過ごすための工夫が記述されている。また、畳については、これから将来も畳が必要であるか否かをアンケート調査したもので、各々まとめると以下の通りである。

①夏の障子とのれん

障子はその目的からしても冬のものである。また冬の間は紙も汚れ、穴もあいてしまっている。そのため夏の間は取り外し、のれんをかけることを薦める。のれんは家庭的な「うちの中」というべき実用品だけに、着ていた浴衣の古などの方がずっと楽しめる。

暑さを感じるということは実際の温度と同時に、夏は暑いという先入観から感じることもあるのである。その点、のれんは風があるとのれんは動く。体に感じない程度の風でも、のれんはそれを表現して見せてくれるため、暑さが軽減されるという心理的効果がある。

暑い夏の部屋に何か動くものが欲しいので

ある。^{*5}

②短いすだれ

街で売っているすだれはたいてい三尺のものか六尺のものに決まっているが、これでは太陽が多く遮られてしまうので、これを一尺くらいに切っただけ軒先へつると感じもよい。家の中にいて、軒の裏がたくさんみえる程いいものである。

木綿糸を三本程をよってとめればよい。できたらその先に細い丸太でいいから結びつければいいのである。こうすればずっと経済的で、実際涼しい。すだれはすいているものだが、長いものはあれで結構風を遮っているのである。^{*6}

③畳の将来

これは、将来の問題として「タタミ」をどうお考えですか。という著名人へのアンケートの結果である。掲載されているものは全20人で、そのうち畳は必要であるという意見が9人、必要ないという意見は7人、どちらともいえないという意見が4人であり、割合を示すと図1のようになる。それぞれの意見について詳細な内容を以下に列記する。

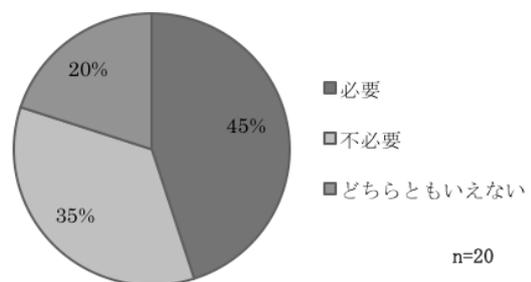


図1：畳の必要性

■畳を必要とする意見：畳み温存派

畳は残すが、すべてを座式とするのではなく、普段の生活は椅子式に変え、一間、二間にだけ残していくべきであるという意見が多く記述されていた。これは、当時は応接間として洋室を一つもつことが普通であったが、将来は洋室と和室が逆転し、和室は一間程度になり、畳は必需品ではなく趣味的に残されていくであろうということが考えられていた結果であるといえる。この中で、畳を必要とする意見は大きく二つに分類される。

a.) 「伝統、習慣」：立派な住宅における畳の美しさとすみ心地良さ、青畳の香りは日本特有の風情がある。また、病気をした時や休息をとる時などは畳の方が落ち着く。畳みは

伝統的であり、畳の上での生活は日本人にとって習慣的であることから捨て難いのである。この理由が最も多く記述されていた。

b.) 「自然」：畳は部屋の中で自然を感じることが出来るものであり、かつ、くつろぐ時に行う動作をすべて行えるという利点が記述されている。この中で三島由紀夫は次のように述べている。

「西洋人でも冬は暖炉のそばに座り、春は庭の芝生に座り、夏は海岸の砂の上に座り、秋は寝椅子の上に身を横たへます。畳は絨毯と芝生と砂浜と藤の寝椅子の兼用物であり、戸内へ導き入れられた戸外であり、冬のさなかにも味はいう庭の生活です。自然を愛する人は、将来も洋館の一部に、端正な戸内の庭- この畳の間- を忘れることは出来ないでしょう。」*7

■畳を不要とする意見：畳否定派

当時の技術では板張りの部屋はすきま風が入ってしまい、暖房設備が不十分であったため畳敷きの方が暖かかった。しかし、将来技術や暖房設備が進歩していくにつれて、畳敷きは必要なくなるという意見が多く記述されていた。畳みを不要とする人の多くは、伝統や習慣を問題にしていないことが読み取れる。この中で、意見は大きく二つに分類される。

a.) 「衛生面」：一般的な家庭の畳は大抵不衛生となっていることが記述されている。理由としては、畳みは手入れを毎日しなければならず、その手入れが行き届いていなければ不衛生となってしまいが、毎日畳を掃除している時間は取れないことがあげられる。

b.) 「近代化」：畳の上での生活は、近代的な生活には適さず時代遅れである。また、合理化が進む中で、何度も取り替えなければならない畳は非合理的である。日本人の生活水準が経済的にも精神的にも引き上げられ、新しい生活様式が創造されれば畳は必要なくなるのである。

■どちらともいえない。

畳に対し好意的な意見が多く記述されていた。畳を必要とする意見、不必要とする意見、両方の意見を肯定しながらも、畳の問題は伝統的な気持ちの解決次第ではないかとしている。

4-3 当時の生活様式の変化・住まい方

『生活と住居』で住まい方については、夏の住い、冬の住い、色彩と室内装飾、部屋の使い方、居間、表口、庭園、厨房、日よけ、

照明、二段ベッドなどが記述されている。

本稿では、この中でも生活様式の変化が読み取れるa.) 冬の住い、b.) 色彩と室内装飾、c.) 表口、d.) 居間、e.) 庭園についてまとめる。

a.) 冬の住い

和風住宅は、夏に趣をもつてつくられていることは広く知られているが、この頃から冬の寒さをどうしのいでいくかという冬の住まい方が模索されていたことが読み取れる。また、巻頭言の中で小野薫は次のように述べている。

「熱の能率利用もあまり必要でなく、また技術進歩していなかった時にこのような住宅が日本につくられてきたということは自然なことだと思えます。けれども現代に、それもあらゆる物資の経済的利用が特に必要とされる日本にこのような日本住宅が果たしてすぐれたものといえるのでしょうか。僅かな燃料でも部屋の大きさが適当であり、換気や壁の伝熱さえ良く考慮されていれば相当に効果を上げることができる筈であり、そのことと暑さに耐えることと両立させることは技術的に可能なことなのです。まず第一に伝統的な日本住宅の概念をすてる必要があるのです。」*8

b.) 色彩と室内装飾

色彩は、人に精神的・肉体的に影響を与えるとされている。日本従来建築は、木材が主要であるからその木の本来の持ち味を生かし、その木目肌の色を生かして用いることに意を尽くしてきた。しかし、洋風住宅については決まりが出来ておらず、混沌としていた。そこで、筆者（村田良策）が洋風住宅に住むと仮定し、その例を示すことである程度の色彩法を見出そうとしている。このことから、洋風住宅の色彩や室内装飾についての知識が、一般の人にあまりなかったということが考えられる。

c.) 表口

一般的に当時の「玄関」は、封建時代の書院造りの立派なものとして意識されていた。そこで、筆者（蔵田周忠）は「玄関」を「表口」と表現し、格式張った既成の観念から脱却させようとしている。またここでは、住宅の大きさの制限がかかっている中で、表口だけ立派にすることは不釣り合いであるとし、小住宅に適応できるよう、単に出入り口であるという機能上の必要性から考えを出発させている。この中で、筆者は次のように述べて

いる。

「とくに、小住宅では外見の玄関を気にするよりも、単に易く、快く、親しくこだわらなく出入りできるものにしたい。なにしろ、家の人は毎日出入りする所であるし、客はまず入ってきてその家庭の第一印象を受けるところであるから外見ばかり良くてもだめなのである。」*8

玄関に対する人々の意識から現在と当時の意識の違いが読み取れる。この頃にも通じる玄関の考え方やかたちが模索されるようになってきたと考えられる。

d.) 居間

当時、居間のあり方についてはそこに住む人が何を求めるかによって異なってくるとされていた。この何を求めるかという“何”の部分には座式か椅子式かである。しかし、当時の住宅は畳敷きになっているところが多く、畳敷きの上で椅子式の生活を送っていた者もいたとされている。また、利便性については、座式は住む人にとって、椅子式は訪れる人にとって便利であると記述されている。

e.) 庭園

森蒔の『将来の都市住宅庭園』*10から、庭園の流れが図2のように読み取れる。

最も古い時代の庭園は「実用的」なもののみであった。次の時代になると、「実用的」な庭園と「観賞」本位の庭園とが別につくられる。さらに時代が進むと、その二つの庭園は融合し、一つの庭園内につくられるようになった。そして、戦前には住宅の合理化に関連し、かなり「機能的」な美しさを持つものが多くなってきた。しかし、戦後大抵の家庭では、家計面からみてその庭園の復旧や維持のために十分な経費をつぎ込めなかった。また、将来の庭園に関しては、ある程度の広さを持ち、利用性が高く、「普遍的」な美しさを備えてなければならないとしている。

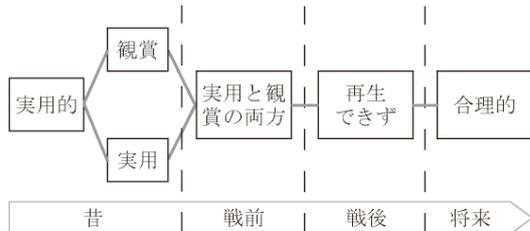


図2：庭園の使われ方

5. 『生活と住居』に寄稿している人物

小野薫や河野通祐など、100人以上の著名人が投稿している。また、建築家とは限ら

ず、各分野の名士が多く登場している。

6. まとめ

1946年に創刊された雑誌『生活と住居』で展開された住まい方の論考に以下のことがある。

①住宅

a.) 戦前までは和風住宅と洋風住宅とが混在していたが、和風住宅が大半を占めていた。戦後間もないこの時期に、和風住宅の伝統的概念から脱却しようという主張があったことがわかる。

b.) 住宅難から、住宅を能率的に建てるために「住宅の規格化」について模索されていた。また、住宅には「合理的」、「科学的」であることが求められ、和風住宅は「非合理的」とであると否定される傾向にあった。

②住まい方

a.) 畳の上での椅子式の生活がある。これは、住宅の変化よりも先に住まい方が変化したためであると考えられる。

b.) 玄関を表口と表現するなど旧来の考え方を換え、より「文化的な生活」を送るためにどうすればよいか模索されていた。

c.) 夏の住まい方だけでなく、冬の住まい方も考えられるようになった。これは、夏を旨とする日本の住まい方に対する改良点の考察である。

参考文献

- ・藤井厚二、松隈章解説『日本の住宅』柏書房（平成21年）
- ・雑誌『生活と住居』誠文堂新光社（昭和22年～23年）

引用

- *1. 藤井厚二『日本の住宅』松隈章解説、柏書房（平成21年）p43
- *2. 小野薫、『巻頭言』、『生活と住居』誠文堂新光社、10月号（昭和22年10月）p3
- *3. 田邊平学、『燃えない家』、『生活と住居』誠文堂新光社、4月号（昭和22年4月）p6
- *4. 本城和彦、『住宅問題の解決の方向』、『生活と住居』誠文堂新光社、5月号（昭和23年5月）p4
- *5. 編集部、『夏の障子』、『生活と住居』誠文堂新光社、6月号（昭和23年6月）p30
- *6. 編集部、『短いすだれ』、『生活と住居』誠文堂新光社、6月号（昭和23年6月）p25
- *7. 編集部、『アンケート』、『生活と住居』誠文堂新光社、7月号（昭和23年7月）p17
- *8. 小野薫、『巻頭言』、『生活と住居』誠文堂新光社、2月号（昭和23年2月）p3
- *9. 蔵田周忠、『表口＝ゲンカン』、『生活と住居』誠文堂新光社、4月号（昭和22年4月）p26-27
- *10. 森蒔、『将来の都市住宅庭園』、『生活と住居』誠文堂新光社、4月号（昭和22年4月）p16-17